岡山県西粟倉村

「奇跡の村」の 教育 見聞録

Nest フェイスブックより

2025年2月

村を訪ねて「生きるを楽しむ」10人に聞いた

村の教育を考え続けた教育課長さん
村の活性化を勢いづける半そでの職員
社会教育と学校教育をつなげる生物学の研究者
住民も喜ぶ教育をめざした地域おこし協力隊
Global に考え Local に働きたい若手職員
村の子どもから学ぶインターン法学生
国際感覚あふれる宿泊施設を経営する母親
高校生になって村を見つめる外国大学受験生
これからの村の学校教育を考える校長先生
都会から教育移住してきた母親

田中　義人

国立大学法人
鳴門教育大学
Naruto University of Education

はじめに

「どうしてこんなに若い人たちが村の教育に関わっているのだろう。」この疑問が、私が西粟倉村に興味をもったきっかけだ。

2024 年 11 月、中国・四国地区社会教育研究大会が開催された。そこで発表したのが、岡山県西粟倉村の若い職員たちであった。小中学校でのふるさと学習に伴走する実践や、学校外の施設で豊かな体験活動が提供される様子が発表された。

ところで筆者は、大学の研究者新米の 1 年生。2023 年度までは公立小学校の校長をしており、コミュニティ・スクールの理念である「地域とともにある学校」や「学校を核とした地域づくり」を経営の柱として学校運営を行ってきていた。ふるさとで 60 歳を超えて活躍する先輩方々と進める地域連携教育は、楽しくて仕方なかった。校区に生れたお坊さんを称える行事を起こし、イベントでは頭を丸めてその役に扮したことを、「そこまでやるんな。」と讃えていただいたことはいい思い出である。そんなことから、大学においても地域連携を研究の軸足にしようとしている。

しかし、地域連携教育においてよく聞かれる課題として、組織参加者の高齢化やコミュニティの弱体化が挙げられる。具体的には、子どもたちに昔の暮らしを教えてくれていた高齢者の体調不良や、老人会の加入者減、また自治会への加入率低下からの行事の縮小等である。こういった動きは、2020 年頃からのコロナ禍がより一層の拍車をかけることとなった。

また昨今の学校側からの課題として、働き方改革の必要性から「本来教員が担うべきこと以外は、保護者や地域に」という動きが急速に強まっている。これまで地域と学校が一緒になって進めてきた行事についても見直しが求められている。

若い職員による西粟倉村の発表は、これらの課題とは無縁と感じるとともに、ここで展開されている実践は、これから全国の地方においてますます求められるものだと、関心を高めた。

1. 奇跡の村 西粟倉

岡山県最北東部に位置するに西粟倉村は、人口約 1400 人の過疎の村である。いや、「過疎の村だった」と表現するべきかもしれない。この村は、各地の人口減に悩む市町村が「平成の大合併」に向かう 2004 年、隣接市との合併協議会から離脱して自立の道を選択した。

村単独での活性化策を模索する中で着目したのが、村内面積の 95%を占める森林であった。2008 年には「祖先が 50 年前に植えた森林を守り、あと 50 年諦めずにチャレンジを続ける」という「百年の森林（もり）構想」を掲げ、これに共感する若者の移住が進んだ。

また、2015 年には、村主催の起業家支援プログラム「ローカルベンチャースクール」を開始した。村外から持ち込まれたアイディアをもとに起業する人を育てるとともに、関係人口との協働による地域づくりを進めていった。

加えて 2018 年には、「百森 2.0」を掲げ、森林の再構築によって森林が生みだす価値の最大化をめざすとともに、キャッチコピー「生きるを楽しむ」の使用を開始した。SDG s に関する取組を本格化させたのもこの頃である。

このような村主催の積極的な活性化策の結果として 2006 年から 2020 年の 14 年間に生れたローカルベンチャー企業は、45 事業に上る。また 2016 年からは村の人口減少率が横ばい傾向と

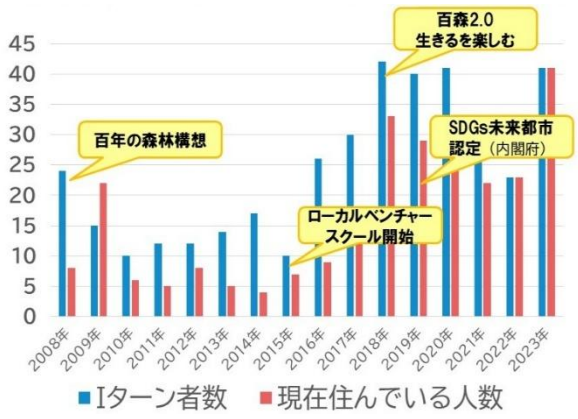


図 1 西粟倉村に I ターンした人たちの状況

なり、2023 年のデータでは、村人口の内Ｉターン者が 20.1%となっている。しかも、過去 16 年間における定住率は 70%を超えている（図 1)。

その間に「環境モデル都市」、「バイオマス産業都市」、「SDG s 未来都市」等、環境対策先進地としての指定も受け、ローカルベンチャーの育成と移住者の多さで「奇跡の村」としてマスコミ等で取り上げられることが多くなった。

2. 雪の西粟倉村を訪ねる

筆者が初めて西粟倉村を訪ねたのは、2025 年の 2 月である。当初は自家用車での訪村を計画していたが、寒波の到来による積雪により公共交通機関に変更した。

岡山発の「特急スーパーいなば」、もしくは大阪発の「特急スーパーはくと」が、村への主な公共交通手段となる。途中上郡で山陽本線より分かれて智頭（ちず）急行線となり美作市の大原駅まで乗車する。村には、西粟倉駅とあわくら温泉駅もあるが、普通列車しか停まらないことや村にタクシーがないこともあって、HP でも大原駅での下車が薦められている。

初めて乗車する智頭急行線は、全線の約 43%がトンネルで占められているという。上郡を出てからトンネルを抜けるたびに様子を変える雪景色に、訪村の期待を高めた。

大原駅では、教育委員会主任の向原大充さんが出迎えてくださった。社会教育研究大会以来の再会である。今回の訪村に対して私の希望を全て受け入れながら各施設訪問について調整をしてくださっている。村での暮らしや村役場に勤めたきっかけ等を伺いながら、あわくら会館までの 6 ㎞ 10 分弱の雪景色を楽しんだ。

3. ぜんぶでひとつの「あわくら会館」到着

あわくら会館は、生涯学習施設と図書館そして役場庁舎が一体となった複合施設である。村の基幹施設として 2021 年に落成したばかりだ。「村のみなさんが自由にやりたいことができる場でありたい」との願いの下、高校生以上の村民ワークショップを繰り返して設計された。村の森林で採れた木が、構造材や家具としてふんだんに使用されている。言わば「村内製品と技術のショールーム」とも言える。

【あわくら会館と施設内村役場】

外は雪が積もっているのに会館内は暖かい。これは森林の低質材や放棄材からのウッドチップを燃料とした、熱供給システムによるものである。保育所や学校等近隣の公共施設へも供給されており、このあたりが「環境モデル都市」たる所以であると感じた。迎えに来てくださった向原さんの服装がいつも半そでシャツなのも、この恩恵？によるものだと聞いた。

「つどいもくらしも、全部でひとつのあわくら会館」のキャッチコピーの通り、会議やイベントなど様々な用途に対応できるという「空間」で、教育委員会教育課長榎原まゆきさんとの「つどい」を開始した。

4. 教育施策に伴走する社団 Nest（ネスト）

私の関心は、先に述べた通り「どうしてこんな若い人たちが…」からスタートしている。その若い人たちの活躍しているのが一般社団法人 Nest である。学校と地域の関係を継続的に構築し、村のめざす教育方針や子どもたちの「やってみたい」に伴走している。Nest の詳細については HP 上でたっぷり検索できるのでここでは割愛したい。これまでに野暮ったい教員らしい発信しかできていなかった自分にとっては、センスの光る眩いページである。

Nest 誕生の背景には、村の危機感があった。「百年の森林構想」から約 10 年後の 2017 年、村長の声掛けで役場内に課を横断する組織「地域創生推進班」が作られた。移住で増えた幼児を迎える保育園の着工時期でもあった。村の活性化に向けて、役場内の 12 人の職員に辞令が出たという。全員にアイディアが求められ、12 のプロジェクトが立ち上げられた。17 時までの業務を終えてから、当時まだ古くて暗い庁舎の中で村民も巻き込みながらの熱い議論を交わす様子を想像した。

地域創生を考える上で、村の子どもたちには中学校を卒業する「十五の春」までにどんな力が必要なのか、という議論の中心にいたのが、榎原課長である。そして 2020 年、子どもたちと地域をつなげたいという願いを実現するために一般社団法人 Nest が立ち上げられた。未来の教育に向かう様々な実践について、村から Nest に業務委託されたのである。

では、「若いスタッフ」はどのように集まってきたのか？一つは口コミ、そしてもう一つは総務省の管轄する「地域おこし協力隊」としての募集と聞いた。結果的には埼玉・宮城・奈良からスタッフが Nest に集まってきた。教育の活性化に「地域おこし協力隊」を活用することは、当時大きな冒険だったのではないだろうか。学校教育についても社会教育についても、基盤はその土地と人のネットワークにある。そこに、新たな若者がチャレンジするにあたり、教育委員会の丁寧な「伴走」があったことは想像に難くない。

「地域おこし協力隊」とは

都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。所管は総務省。

隊員は各自治体の委嘱を受け、任期はおおむね 1 年から 3 年。令和 5 年度は全国 1164 団体で 7200 人の隊員が活躍している。

5. 昼食は移住者が開店させた新店で

さて昼食は、新しくオープンしたお好み焼き店を紹介していただいた。先客が向原さんに「どうした？半そでは？」と声をかけた。半そでがトレードマークの彼が、上着直用姿を見られて少し悔しそうに受け答えする姿が微笑ましかった。

【教育委員会職員とお好み焼き店で】
左から向原・榎原・筆者

ここは、村に移住してきた備前・日生町のカキオコ（牡蠣のお好み焼き）の名店の娘さんが経営しているという。平日でも賑わう真新しい店内に、ここが人口 1400 人に満たない村であることを忘れがちになる。キャベツが見えないまでに一面にカキを並べて焼いたカキオコの味とボリュームに、ますますの繁盛を確信した。

大満足で店を出た目の前には、田畑に降り積もった雪景色が広がる。すぐ隣に視線を移すと、真新しい 2 棟の住宅があった。聞くと 3LDK の村営住宅という。移住者には駐車場付きで家賃 25,000 円で貸し出される。ここには、山中にありながら熱々のカキオコを食べられる豊かな暮らしがある。

現在では、村への移住希望者があれども貸し出す住宅がないらしい。また、人気のある村の中心地には空き家が少ないという。やがては村の魅力に惹かれた人々の新築一戸建て住宅がどんどん増えていく、そんな未来を描くこともできた。

【村営住宅】

6. 奇跡の若者 Nest スタッフ

【Nest 福岡さん】

一般財団法人 Nest は、それぞれに魅力的な 3 人のスタッフで構成されている。リーダーの福岡要さんは、次々と Nest の実践、そしてそこに込められた思いを語ってくださった。前職は、どこかのいわゆる「教育関係者」かと思って伺ってみたところ、「専門としたのは生物学」と言う。これまでにも、遊佐町（山形）や久米島町（沖縄）でも学校を支援してきており、その動きの中でこの村にやってきた。

もう一人は、今井晴菜さん。野外活動やまちづくりに興味があると言う。前職では観光業に関わっていたそうだ。いくら観光に力を入れても地元の人は喜ばない。そこから教育の世界でのチャレンジを始めたらしい。なるほど…である。そして青木采里奈さん、Global に活躍する中で Local に興味をもったらしい。3 人ともに教員免許を持たないが、教育に関心が高いというのがおもしろい。

Nest は、事業の一つの柱として地域学習の組み立てを行う「教育コーディネーター」を担っている。地域と学校をつなぐ役割を果たすこの職は、コミュニティ・スクール成功の鍵を握っているといっても過言ではない。今回の取材に際して、下調べをしてから臨んだが、村外からの若いスタッフがコーディネーターになり、しかも教員に「伴走」ができるのか少々疑問であった。というのも、コーディネーターを PTA 会長経験者や退職教員が担う例を多く見聞きしてきたからである。若いスタッフには、失礼ながら教育実習生をイメージする。しかし取材を通して次の 3 点を知り、心配は完全に払拭された。

【左から青木・今井さん】

- Nest は、地域ネットワークと経験値の豊富な教育委員会と協働して活動している。
- Nest のスタッフには、教育に対する熱い思いとコミュニケーション力が備わっている。
- Nest のスタッフは、毎週 2 回、小・中学校で給食を共に食べ、児童生徒を理解するとともに、教職員との情報交換を行っている。

村の HP には Nest のスタッフとして求める人物像が次のように明文化されている。

> ・ コミュニケーションをとろうとする方
> ・ 遊びがとことん好きな方
> ・ 村や日本、世界の教育の未来を一緒に描いてくれる方
> ・ これまでの歴史や文脈を尊重できる方

3 人のスタッフにとって、これらのことをよく理解した上での採用申込であったのだろう。いや、むしろ「百年の森林構想」等の魅力発信を通して、この若者たち 3 人がスタッフとして移住してくるという「奇跡」がおこったとも感じた。このスタッフの下、村の教育事業はどんどん進んでいくことになる。

7. 居場所づくりの拠点 Pocket 誕生

【Pocket エントランス】

Nest 誕生以前 2017 年から、村では「あわくらみらいアカデミー」をスタートさせていた。「地域創生推進班」の榎原課長たちによるプロジェクトであり、村の全てをフィールドにして、感じ、考え、チャレンジする場を子どもたちに提供していた。「十五の春」を意識した、学校でも家庭でもない、第三の居場所づくりでもあった。

現在ではこの運営は、Nest に引き継がれている。対象を小学 1 年生から中学 3 年生までとし、子どもの「やってみたい」をプロジェクト化して

いる。竹竿を作って釣りをしたり、CAFÉ を開いたり、馬での登校にチャレンジしたり…とにかく「やってみたい」をスタッフが全力で応援するのだ。こういった活動の拠点として、Pocket が 2024 年に完成した。多世代が混じりあう「コミュニティモデル」の居場所をめざして、次の三つの用途をもっている。

【Pocket 屋内活動広場】

① 自然遊びの出撃基地
（「BUKIKO」に遊びグッズがいっぱい）
② 文化交流のおもちゃ箱
（シアターもギャラリーも百科事典も）
③ やってみたい！の工房
（キッチンも工房も実験室も）

また行事的な「みらいアカデミー」と並行して、日常的な居場所 Pocket が週 3 日間開かれている。ここは、スタッフの伴走を受けて、子どもたち個人で「やってみたい」を追究する場である。この日は千葉から移住してきた 5 年生の女の子が、脚本を執筆していた。この村でもミュージカルをやりたいのだと言う。

【村出身のミュージカルスター誕生は 10 年後？】

そして、ここでまた新たな出会いがあった。インターンとして Pocket で活動している女子大学生である。彼女が薪ストーブに火を入れたのを見届けてから、この学生こそ教育学部かと聞いてみた。答えはなんと法学部、私の疑問は「どうして法学部の学生が村の教育に関わっているのだろう。」に変わった。その問いには、「いじめや虐待、子どもたちの人権について考えるのに、まずは子どもたちを知りたい」と答えてくれた。西粟倉と Nest の実践は、確かに様々な未来に向かう若者を引き付けている。

Pocket には彼女のような短期スタッフが寝泊まりするための寝室も用意されている。若干の食事代さえ準備できれば、面接を経てインターンとして受け入れられる。ここは、子どもたちのためだけでなく、子どもや教育について、また村の自然や文化について学びたい大人たちにとっても学習センターとなっている。

8. 村にもある 本屋と文房具屋さん

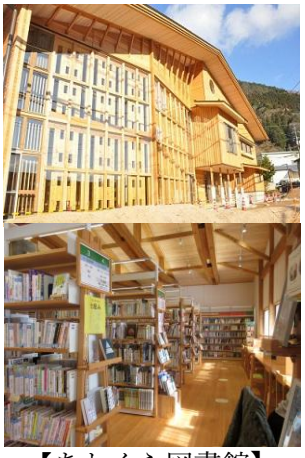
Pocket に併設する「化猫堂」は、村唯一の本屋と文房具屋さんだ。「化猫堂」の名前は、この地域に伝わる伝説に由来すると聞いた。スタッフが採算度外視で運営するわけは、買い物体験を通した文化の継承のためである。ここでも「十五の春」への意識を感じた。

【手作り感じる陳列】

本をたくさん読んだり、イベントに出たりするとたまる村のポイントサービス「あわポ」を活用しての買い物が人気らしい。

9. 話しても滑っても良い図書館

村の図書館と言えば、「図書室程度」を想像してしまう。しかし、あわくら会館内の図書館には、村の工場で作られた無垢の木の書架にたくさんの本が収められており、人口規模で考えると恐らく日本一の蔵書数である。


【あわくら図書館】

2020 年に完成したこの図書館、設計段階からの村民ワークショップの成果がいたるとこ

ろに感じられる。ここではおしゃべり OK、飲み物も OK、ままごと遊びのエリアまである。おまけに中２階から１階へは大人も使える木製滑り台でも降りられる。そして、静かに読書をしたい人のためには「静寂室」が設けられている。

「村民のやりたいことをサポート」のコンセプト通りに、この図書館は子どもにも大人にも楽しめる「生きるを楽しむ」ための情報が集まっている。「実は村外からの利用者の方が多いんですよ。」という裏話も紹介してもらえたが、交流人口の増加に図書館が一役買っている。

図書館を出たところにあるサロンでは、ちょうど学校を終えた中学生のグループが、携帯片手におしゃべりしていた。あわくら会館全体が村民の「つどいの場」となっていることを感じた。

【役場で過ごす中学生】

10.「十五の春」を超えて―高校生の思い―

消化不良を起こしそうなくらいの「上質な情報」に浸かった一日を終え、宿泊場所として選んだのは村内にある「軒下図書館 B&B」である。西粟倉の自然や暮らしについて英語でガイドを受けたり、本格的なヨガ体験ができたりもする外国人にも人気の古民家だ。

ここは、岡山に生まれロンドンで小学校教師をしていたチャールズ裕美さんと、フランス人の夫が経営されている。この民家に暮らしていた裕美さんの祖母が、自宅の一室を「軒下図書館」として地元の子ども達に開放していたことが、名前の由来である。2009 年、裕美さん夫婦は空き家になっていたこの家に当時３歳と０歳の子ども達を連れて移住してきた。ちょうど「百年の森林構想」が掲げられた頃であった。

ロンドンスタイルの夕食に舌鼓を打っている時に、高校３年生の息子さん広伸さんが挨拶にきてくれた。現在鳥取市内の高等学校に通っているという。実はこの村に高校はない。自宅から通える 5 校が県内外にあるが、その他の学校へ進学する場合は寮生活になるという。高校生になり村を出た広伸さんが、ふるさとのこの村をどう思っているのかが気になった。

【ダンパ会場のホール】

小中学生活を少人数の固定化された関係性の中で過ごしたロンドン生まれの広伸さんにとっては、楽しい思い出ばかりではなかったようだ。そんな彼の「町」に出てからの思いに触れてみたかった。

彼は、高校２年の夏に村に戻って企画したダンスパーティーのことを嬉しそうに語ってくれた。ロンドンへの留学経験をもとに、「プロムみたいなダンスパーティーを西粟倉の人たちと一緒に楽しんでみたい！」と企画したそうだ。同級生はもちろん、「やってみたい」に伴走する Nest がここでも全力で応援してくれた。

場所は、あわくら会館内のホール。ここは防音機能付きでダンスパーティーの会場にはうってつけだ。余談になるが、この村は村議会の議場を常設していない。議会の開かれる時には、このホールに議長席等の可動式家具が設置される。このことも村民ワークショップの成果なのだろう。

広伸さんは、どうして村でダンスパーティーを開きたかったのか。高校生になってからの思いの変化を語ってくれた。彼は、Global な教育が特徴である高校に進学した。そして Global な視点をもって西粟倉を見た時にこそ、ふるさとが、そしてそこに生きる人々の暮らしがより輝いて見えたというのだ。そこで、ダンスパーティーという自分の「やってみたい」をふるさとの村で実現させた。

【広伸さん】

まさしく、これまで村で取り組んできた「十五の春」を超えた高校生の、一つの理想モデルとなったのではないだろうか。

広伸さんといつまでも話をしていたかったが、「試験勉強があるので…」と自分の部屋へ戻った。彼の言う試験とは筆者が想像した高校の定期試験ではなかった。オランダの大学への入学試験、彼は弁護士の夢を国際司法裁判所のあるオランダで叶えることにチャレンジしていた。

11. 西粟倉小学校5年生と あわくら大学生

【あわくら大学開始】

翌朝の取材は、あわくら会館「百森ひろば」での「つどい」からスタートした。

今日は、月１回のあわくら大学の日。満 65 歳以上の大学生が、雪道を歩いて、また村営バスに乗って集まってくる。健康教室や日帰りバス旅行、音楽や映画鑑賞等のある高齢者にとっての社会教育の場である。

今日は、小学５年生との「ふるさと元気学習」。児童は、川のゴミ拾い等から学んだことを発表してから、高齢者に昔の川の様子を聞き取っていた。子どもたちをびっくりさせたのは、「特別天然記念物のオオサンショウウオ？ああ昔は食べていたよ」という話。このような豊かな自然の話とともに、「昔の川はゴミ捨て場、いいことではないけどな。」というリアルな情報も学びを深めていた。

「ふるさと元気学習」は、村の自然と、そこに生きる人達と交流しながら、子ども達の人間力を高めることを目的としている。西粟倉小学校の全校生が学年ごとに取り組む、特色ある教育活動である。

【昔の川について取材】

12. 西粟倉小学校訪問

午後からは、全校生 65 人（令和６年４月現在）の子どもたちの学ぶ西粟倉小学校を訪問した。出迎えてくださった高本英樹先生は、若い頃にもこの学校で勤務し、楽しい思い出をいっぱいもって今年度から校長として赴任されたそうだ。平成 11 年に落成した校舎の広いオープンスペースや、木材をふんだんに使った建築方法からは、当時も村が子どもたちの教育にずいぶんと力を入れていたことを感じる。

【給食を支える村の生産者】

全校生で給食の食べられるランチルームの案内を受けながら、今年度「学校給食優良学校」として文部科学大臣から表彰されたことを伺った。絵本に出てくる再現料理を提供する「ものがたり給食」や、地場産物を多く取り入れ、地域生産者ともつながりながら食育を行う「ふるさと元気給食」など、子どもたちがふるさとを愛し、楽しみながら給食を食べられる活動が評価されたそうだ。

村立学校の給食調理員の方々と学校がしっかりとタッグを組んで、全国で九つの小学校だけの名誉に輝いたこと、これも村の誇りであろう。資料によると、関正治教育長は「児童にとって学校給食は村の良い思い出であり、その思い出が郷土愛を育んでいる。」と話されたようだ。

さて、気になる児童数の変化だが、Ｉターン移住者の子どもたちが約半数を占めており、現在はほぼ横ばい状態だという。村では教育振興基本計画の中で「園児・児童・生徒数の推移」を発表している（図 2）。一概に比較できないが、日本の子どもの人口（15 歳未満）が、2008 年（約 1,720 万人）から 2024 年（約 1,401 万人：推計値）にかけて 18.5%も減少していることから考えると、この村の状況がどんなに素晴らしいこと

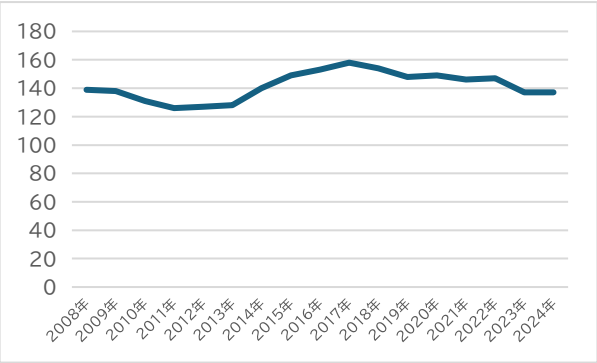


図 2　西粟倉村園児・児童・生徒数の推移

か理解できる。特に、「百年の森林構想」の 3 年後、2011 年から 6 年間の増加が大きい。図 1 のグラフと重ねてみると、村の子ども人口増加は、I ターン移住者の増加によるものだと想像される。やはりこの村は、教育移住においても「奇跡の村」なのである。

13. 学校から発信するこれからの村の子ども像
構想は「人の森　百年」

移住してきた児童の増えた学校の運営について、工夫や配慮点について高本校長先生に伺ってみたところ、「どこでも子どもたちは同じですよ。」という答えをいただいた。情報の氾濫している現代社会において、過疎化しているからとか、山間地だからとかいう違いは少ないという実感なのだろう。

「しかし、…」と校長先生は続けられた。どこに暮らしても大切なのは、人と人とのつながり。そして人との関わりの中で、物事を他人事ではなく自分事として考えることが大切ではないか。小学生を中心にして、異学年児童はもちろんのこと、いろいろな世代の人たちをつなげる、そんな教育を展開していきたいとのことである。そのためには、「ふるさと元気学習」についても、もっと子どもたちが主体性をもち、教員と一緒に高めていかなければならない。授業改善に向けた教員研修は、校長先生が中心となって開始しているそうだ。

【高本英樹校長】

まだ教職員にも学校運営協議会でも話していないんですが…と、こっそり紹介いただいた来年度から小学校でめざす教育構想は、「人の森百年」。森林だけでなく、そこに暮らす子どもたち、住民たちの「生きるを楽しむ」未来を百年以上続けさせるという構想だ。

「奇跡の村」は、住民たちと一緒に教育を更に前へ進めていく校長先生を、また迎えたと感じた。

14. 村の教育を 母と
教育公務員と
経営者の視点からみる

【尾崎さん】

この見聞記、最後はこの村に教育移住した母親であり、教育に関わる公務員であり、企業の新規事情コンサルティング等も展開する尾崎えり子さんに取材をお願いした。

彼女は、奈良県生駒市に教育改革担当者として採用されたのを皮切りとして、北海道中富良野町でもアドバイザー、そして昨年からは大阪府の教育委員を務めている。

ビジネスの世界で第一線を走りながら、教育公務員として活躍している尾崎さんが、この村の何に惹かれて教育移住したのか、そして、実際にこの村で子育てをしてどう感じているのか、ぜひ伺いたかった。

取材場所として選んでいただいたのが、村に新しくできた「BASE101% －NISHIAWAKURA－」。"可能性発掘基地"をテーマにレストランやカフェ、セレクトショップ、木材アウトレットマーケット、いちご狩りハウスなどで構成された複合施設である。この施設からも「1400 人の村に！」という驚きをもった。若者にも支持されるセンスの良

【BASE101%】

さを感じるこのレストランでは、広伸さんのダンスパーティーの第 2 回目を盛大に開催したそうだ。村の食材を贅沢に使用した昼食を一緒に食べてから取材を開始した。

〔視点①村での子育てを母親としてどう思うか〕

校内の異学年の子、そして赤ちゃん、お年寄り、地域の方等、交友が縦に広がった。他世代の人たちと一緒に遊べるようになったことが良かったと思っている。

〔視点②これからの地域連携はどうあるべきか〕

まず、その地域が何をめざしていくのか、そのあるべき姿から逆算した時に、何をなすべきか変わってくる。

この村でおもしろいのは、子どもの「やりたい」を大人が全力でサポートしている。その「やりたい」を地域連携の真ん中に置き、地域の課題と紐づけ、解決に導いている。

〔視点③「上質な田舎の教育」に必要なことは〕

どこで学んでも実践を積むことが大切。学校で学習してきた内容は、実践においてしか実感できない。この村には、子どもたちの実践を受け入れやすい環境がそろっている。また、ここでは実践を受け入れるだけでなく、子どもたちにさらに期待して新しいことをやらせている。

〔視点④これからの子どもたちに必要な教育環境は(ビジネスで培った経験値を踏まえて)〕

レジリエンス(回復力)を身につけられる環境。社会人になれば、うまくいかないことばかりである。小中学校までの本物の体験を通して、失敗もさせながら社会で本当に生きる力を身に付けさせることが必要。

現在尾崎さんは、この村に移住してきて「芸術家」を始めている。教育についても、経営についても、この村には既に動き出して成果を出している人がいる中で、別の手段で村を盛り立てようとしているのだ。やがて葉加瀬太郎氏による音楽にのって、TBS『情熱大陸』で紹介されることを本人も私も楽しみにしている。その時には、更にこの村が「上質な田舎」として輝いていることだろう。

おわりに

雪の西粟倉村への 1 泊 2 日の教育取材旅行。様々に刺激をいただいた人たちのことを記録しておきたいという思いから、原稿を書き始めた。

取材を終えて、この村では「学校を核とした地域づくり」を超えて、「住民を核とした未来につながる地域づくり」が進められていることを感じた。もちろん住民の中心には子どもがある。

では、同じように「お題目」を唱える自治体とこの村は何が違うのか。それは、未来像の実現に向けて行政と住民が話し合い、目に見える教育施策と成果を出していることではないだろうか。合併協議会離脱時の危機感から、村民一体となって活性化を図る実践を積み重ねてきたのだろう。

しかし今回、実際に村の人々に会ってみると、誰からも危機感ではなく「生きるを楽しむ」様子を感じた。村に関わった人たちが暮らしを楽しみ、その様子を見た新しい仲間が移住し、新しい風を吹き込んでいる。また、新しいものを創造しようとする大人たちの姿は、子どもたちにも反映されている。

やはりここは真似のできない「奇跡の村」か。だが、人のことつまり教育のことなら、どの自治体においても同じようにできる可能性は必ずある。その一つのモデルがこの村だと確信している。

発　行：　2025 年 6 月 1 日
著　者：　鳴門教育大学　田中義人
取材協力：西粟倉村に暮らす方々